

郡山市とSDGsの推進に関する包括連携協定を締結 オンライン調印式とオンライン記者会見実施

令和3年2月12日(金)に本学は、郡山市とSDGsの推進に関する包括連携協定を締結しました。

本協定は、郡山市が保有する市民の健康に関する各種データと本学が研究分野でこれまで蓄積した知見という相互の資源を活用して協働し、郡山市民、ひいては福島県民の健康寿命の延伸と健康格差の縮小を図ることを目的としています。

調印式はオンライン形式で行われ、調印に先立ち、品川萬里郡山市長から「この協定は、令和元年7月1日『自治体SDGsモデル事業』に選定された『全世代健康都市圏創造事業』の一環として行う。『健康』をキーワードに『医療』『福祉』分野だけでなく、セーフコミュニティ事業と連携し、安全・安心で『こどもから大人まで全ての世代が健康で生きいきと暮らせるまち』をスローガンに掲げ持続可能なまちづくりを推進するものである。この協定をもとに、本市と福島県立医科大学が共同研究事業を実施し、その研究成果を本市の施策・事業へ展開を図っていきたい。福島県立医科大学の高度な知見による課題解決や各専門分野からの多角的な分析が加わることで、行政では持ちえない知見や専門分野からの意見を得ることが期待できる。コロナ禍の中で、新規施策・事業の創出や今後の広域圏での展開も見据えた、先進的な取組みとなると考えている」との挨拶をいただきました。

すべての人に健康と福祉を

また、本学の竹之下誠一理事長兼

学長からは「郡山市の先駆的な取組みに携わる機会をいただいたことに感謝申し上げます。これまで本学は『県民の保健・医療・福祉に貢献する医療人の教育および育成』という目的の下、教育、研究、診療、県民の健康の見守りに取り組んで来た。SDGsの内容は多岐にわたるが、その一つである

『すべての人に健康と福祉を』という目標を始め『誰一人取り残さない』持続可能な社会の実現を目指すという考え方は、全ての人の命と健康の問題に真摯に向き合ってきた本学の姿勢とも重なるものであり、これまで本学が蓄積した経験をいかせるものと考えている。共同研究事業においては、当面、保健科学部の教員が主に関わっていくことを想定しているが、大学全体で取り組み、各種のデータを基に郡山市をはじめ福島県民の皆さんの健康増進のために役立つ研究成果につなげ、地域に貢献していきたい」と挨拶しました。

19の研究テーマの成果に期待

その後、安村理事から協定内容について「今回の協定は『郡山市民、ひいては福島県民の健康寿命の延伸と健康格差の縮小』を目的としており、本学がこれまで取り組んできた『県民の健康の見守り』という経験が大いに役立つものと考えている。また今回の共同研究は、医療・介護・健診等のデータから、健康増進、重症化予防や介護予防の方策を見出



竹之下理事長兼学長と品川萬里郡山市市長(画面内)

そうとするものである。現在、保健科学部4学科から19の研究テーマが提案されており、それぞれの専門性を生かした分析から、健康増進に向けた施策につながる研究成果が生まれることを期待している。4月以降実施していく予定だが、研究成果のとりまとめには1～2年の期間を想定している」と説明がありました。

その後、本学の竹之下誠一理事長兼学長と品川萬里郡山市市長がそれぞれ包括連携協定に署名しました。郡山市からは、本田文男保健福祉部長、塚原太郎保健所長、安藤博政策開発部次長、本学からは、安村誠司理事、矢吹省司新医療系学部設置準備室長が陪席しました。

今回の包括連携協定締結による今後の健康増進に向けた施策につながる研究成果に期待が持たれます。



竹之下理事長兼学長の挨拶



安村理事による本学の紹介



郡山市から見た調印式の様子

学部学生 of 原著論文、学術誌に掲載 日本臓器保存生物医学学会「Organ Biology Vol.28 No.1」

このたび、本学医学部と看護学部の学生が執筆した論文が、日本臓器保存生物医学学会の学術誌「Organ Biology Vol.28 No.1」に掲載されました。学部学生が自発的に論文を受けて「共著の伊藤さんはじめ医学部のみなさん、西野さん、そして最後まであきらめずにご指導下さいました丸橋先生に深く感謝申し上げます」と喜びの声を語りました。また、指導教官を務めた肝胆膵・移植外科学講座の丸橋繁主任教授は「看護学部、医学部1年(当時)の7名が、本研究に自主的に参加し、とても熱心に取り組んでくれました。第46回日本臓器保存医学会学術集会(2019年)で発表(※広報誌いごころVol.16で紹介写真)した内容を、論文化したもので

論文タイトルは「『脳死臓器提供』についての意識調査：今、若い世代は何を考えているか？—福島県の高中生・大学生のアンケート結果から—」。執筆者グループ9名は、福島県の高中生110人と大学生219人に対し、臓器移植をテーマにした授業とアンケートを行い、その結果を論文にまとめました。論文では、この授業をきっかけに、移植医療に関する正しい知識を得、家族との対話の機会ができたことで、臓器移植に対する否定的なイメージが減り、臓器提供の意思表示に、より積極的に取り組むようになったことが示されています。日本における死後の臓器提供数は極めて少ない現状が続いている中、若い世代への臓器移植医療の教育が、今後の提供数増加へのアプローチとなることを示唆した意義深い論文です。

論文執筆者の一人、看護学部2年の山内麻里子さんは論文掲載が決まったことを受けて「共著の伊藤さんはじめ医学部のみなさん、西野さん、そして最後まであきらめずにご指導下さいました丸橋先生に深く感謝申し上げます」と喜びの声を語りました。また、指導教官を務めた肝胆膵・移植外科学講座の丸橋繁主任教授は「看護学部、医学部1年(当時)の7名が、本研究に自主的に参加し、とても熱心に取り組んでくれました。第46回日本臓器保存医学会学術集会(2019年)で発表(※広報誌いごころVol.16で紹介写真)した内容を、論文化したもので



論文執筆者の皆さん

す。力を合わせてアンケート調査と解析を行い、立派な原著論文にまとめたことは、大変素晴らしい成果です。今後の活躍を期待しています。」とコメントしました。



広報誌
いごころ
Vol.16
はこちら▼



▲論文はこちら

論文執筆者
福島県立医科大学 看護学部2年
山内麻里子、西野結愛
福島県立医科大学 医学部2年

伊藤瑞歩、稲田賢嗣、大田裕介
齋藤周也、齋藤直人
同志社大学商学部 准教授
瓜生原葉子

福島県立医科大学 医学部
肝胆膵・移植外科学講座 主任教授
丸橋繁

ふくしま県民公開大学 テレビ放送のお知らせ

ふくしま県民公開大学は、本学・広島大学・長崎大学で構成され、放射線災害・医学研究の学術拠点の形成を目的に、2016年に設置された「放射線災害・医学研究拠点」事業の一環としてこれまで開催してきました。共同研究

の成果発表や学生によるディスカッション、食や子育てといった身近なテーマ等様々な内容を通して県民の皆様に情報を発信しています。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、従来の集合開催ではなく、福島テレ

ビで全4回シリーズの番組放送として開催します。既に、第1回目は3月4日に放送されましたが、2回目～4回目までの放送予定については下記の通りです。みなさま、ぜひご覧ください。※各回とも放送時間は、20:54-20:58を予定。

- 第1回：3月4日(木) 放送済
講師：常磐病院 尾崎 章彦先生
テーマ：「原発事故後の乳がん患者のその後の健康影響」
- 第2回：3月11日(木) 放送予定
講師：放射線医学県民健康管理

- センター 助教 石井 佳世子先生
テーマ：「震災後の福島県内の母親の産後うつについて」
- 第3回：3月18日(木) 放送予定
講師：公衆衛生学講座学内講師 森山 信彰先生

- テーマ：「心を元気にする運動」
- 第4回：3月25日(木) 放送予定
講師：災害こころの医学講座 助手 竹林 唯先生
テーマ：「心の健康を取り戻すきっかけとは?」